

「社会調査および実習」履修者の授業への主観的評価

Course Evaluation by Students of Social Research Laboratory

西野 理子・杉山 憲司

Michiko NISHINO, Kenji SUGIYAMA

植野 弘子・須田木綿子

Hiroko UENO, Yuko SUDA

三上 俊二

Shinji MIKAMI

1. 本稿の目的

東洋大学社会学部は本年、創設50周年を迎える。本学で教鞭をとってきた多くの先達は、日本内外各地をフィールドとして研究を蓄積されてきた。地域空間にとどまらず、マスコミや図書館情報といったフィールドを専門分野とする諸先輩も、本学部には数多い。そして社会調査は、学生指導の核としても位置づけられ、1部のみで2,700名前前後が所属する大規模な学部ながら、全員に社会調査実習の授業を必修で履修させるカリキュラムを維持している。

これだけ大規模な学部全体で社会調査実習を必修授業として維持していくには並々ならぬ苦労があり、もちろん問題点も多々生じている。授業担当者をはじめとして社会調査実習の授業のあり方は、2008年度に検討課題になり、学部長諮問の検討委員会がたちあげられた（引き続き検討中である）。そして、同じ2008年度に、学部の授業評価アンケートが、「社会調査および実習」授業を対象に実施された。

本稿は、この授業評価アンケートを用いて、本学の「社会調査および実習」履修生の当該授業への主観的評価を探ろうというものである。主たる目的は、授業履修生の主観的な評価の構造やその背景を探ることにある。授業評価アンケートの結果をその平均値や合計点だけによって観察することの限界は、これまで指摘されている通りである（八木、2004）。本稿では、社会調査実習という実習型の授業を手がかりに、昨今の大学生の授業評価の構造が学生の関心や行動の次元とどのように関連しているかを探ることにしたい。大学入学率が5割を上回るようになった今日、高等教育機関たる大学での授業のあり方も、またそれが受講学生にとってもつ意味も日々変化しつつある。学生と接していても、多様な学生のタイプがみられることや、学生からのニーズの多様化を感じる。実習型の授業についてでありながらきわめて標本数の多い本データを用いることにより、日頃教員が抱いている実感を具体的に検証し、授業改善や教員の研鑽への基礎的データを明示する機会としたい。

2. 用いるデータ

本稿で用いるデータは、2008年度に社会学部自己点検評価委員会が実施した授業評価アンケートである。2008年11月17日から29日の間に、社会学部の2年生と3年生が必修科目として履修している各演習授業において実施された。「社会調査および実習」授業を履修中あるいは単位を取得してからそれほど時間がたっていない学生を対象に選定したもののだが、3年生と4年生の合同演習の授業時にアンケートを実施したこともあり、対象には4年生も含まれることになった。なお、調査では自由回答も回収しているが、本報告ではマークシート回答票の回収データのみを用いている。

有効回収数は1,183票で、2年生が42.8%、3年生が38.1%、4年生が19.0%を占めている。調査時点では2・3年生配当の授業であるため、回答者の過半数の53%が現在履修中であった。うち、再履修者は2.6%とわずかであった。男性38.5%、女性61.2%、性別不明0.3%と女性が多いが、ほぼ学科ごとの所属学生の性別分布を反映している¹⁾。

まず、学生の授業への評価を操作化する。学生が授業にどのような姿勢で取り組んでいるかを測定するには複数の方法がありうる。出席状況や遅刻の有無などの客観的な指標を用いる方法もあれば、結果としての態度を成績評価から推定する方法もある。学生個人の自己認知によりとらえることも考えられる。本調査では、なるべく客観的な指標を採用したいというねらいと、学生個人が回答者であるという方法的な制約から、ひとつには行動の認知を測定する手法をとっている。もうひとつには、複数項目により、授業への主観的な評価を測定している。

授業への評価の行動的側面は、ここでは、2つの指標からとらえる。1つは、「何割程度出席していたか」という出席状況の認知に関する質問への回答（10割（全出席）／9割程度／8割程度／7割程度／6割程度／0～5割）である。本学の「社会調査および実習」への出席状況は総じて良好で、32%が「全出席」、38%が「9割程度」出席で、あわせて7割の者が9割以上出席している（表1）。出席が6割以下は8%しかおらず、出席状況から単位取得が見込めないのは1割以下のである。ここでは、「全出席」「9割程度」「8割以下」に三分割した。もう1つは、「授業時間外で必要とした時間」への回答である。平均して週に「3時間以上費やしている」「90分程度」「60分程度」「15分程度」「ほとんど時間が費やしていない」から1つを選んでもらっている（表2）。

表1 出席頻度（%）

N	0～5割	6割程度	7割程度	8割程度	9割程度	10割（全出席）
1,169	3.5	4.6	8.3	13.3	37.9	32.4

注：不明を除く

表2 この授業のために授業時間外に必要とした時間（%）

N	ほとんどなし	15分程度	60分程度	90分程度	3時間以上
1,168	21.1	29.1	30.9	12.4	6.4

注：不明を除く

主観的側面である授業への満足度は、18項目で質問した。これらの項目を用いて、最尤法を用い、バリマックス回転をかけた因子分析を行なった。0.35の負荷量を基準として、基準に満たない、ないしは2つ以上の因子に基準以上の負荷量を持つ項目を除外しながら因子分析を繰り返した結果、最終的には11項目を用いた因子分析から3因子が抽出された。用いた質問項目は、表3の表側の通りである。第1因子は分散の21.9%を、第2因子は18.6%を、第3因子は15.5%をカバーしており、これら3つの因子を累積すると分散の55%をカバーしていることになる。

各因子の負荷量は表3の通りである。第1因子は、「知的成長」「目標達成」「成果」といった質問への肯定的回答の負荷量が高いことから、授業の内容が自分の目標や成長に大いに役立ったという評価といえる。ここで第1因子を「成果満足度」と呼んでおく。第2因子は、「主体的」「積極的」な取り組みや出席状況に関する質問への肯定的回答の負荷量が高いことから、自らの授業への取り組みの態度を評価したものと判断される。そこで、これを「取組満足度」と呼んでおく。第3因子は、「授業の進め方のペース」「授業のレベル」「受講生数」が適切であったという評価の負荷量が高い。これらは、授業の進行具合に関するものであり、学生にとっては所与の制度的側面としてとらえられるであろう。そこでここでは「制度満足度」と呼んでおく。

表3 授業への主観的評価にかかわる11項目の因子分析結果

		成果満足度	取組満足度	制度満足度
問24	私はこの授業によって知的に成長できている(できた)。	.760	.286	.226
問23	私はこの授業において、自分が望んだ目標が達成できている(できた)。	.721	.196	.344
問29	履修の成果は十分にえられた(えられそうである)。	.712	.260	.333
問31	履修したことは他の授業で活用できている。	.564	.204	.142
問35	私はこの授業に主体的に取り組んでいる(いた)。	.320	.823	.116
問36	私はこの授業において、発言や作業に積極的に取り組んでいる(いた)。	.234	.802	.067
問37	他の履修者と円滑にコミュニケーションできている(いた)。	.146	.492	.137
問33	私はこの授業に良く出席している(いた)。	.088	.450	.117
問20	授業の進め方のペースは自分にとって適正である(あった)。	.290	.088	.793
問21	授業のレベルは自分にとって適正である(あった)。	.314	.153	.746
問19	受講生数は適正である(あった)。	.099	.123	.416

3. 分析課題

これらの因子得点を主観的評価として行動面の評価との関連を確認したところ、満足度それぞれの特徴をさらに確認することができた。「取組満足度」は、コースの希望がもともとなかった者で低く、出席状況が良好なほど高い(図1)。そして、この授業のために授業時間外で必要になった学習時間が多いほど高かった。実際に授業に積極的に参加した行動レベルの取り組み状況と一致していることがわかる。「制度満足度」は履修したコースが当初の希望通りだった者で高く、授業時間以外で必要となった時間が多い者ほど顕著に低い。授業に出席していないほど低い一方で、全出席より8割程度出席者でもっとも高くなっている(図1)。「制度満足度」は授業の進め方等への満足度の高さから抽出された因子であったが、そうした側面に満足している学生たちが熱心に授業

に参加しているわけではなく、むしろ逆に、無理せず履修できている（できた）ことがこの満足度の高さに結びついていることが示唆される。ここでの「制度満足度」は、制度を正当に評価しているというより、現状への満足度をあらわしている側面が大きいといえそうである。

ついで、満足度の分散のもっとも多く（22%）をカバーしていた「成果満足度」に着目し、これと行動面の出席状況との関連を確認したところ、「成果満足度」は8割程度出席者でもっとも高く、9割ないしは全部出席した者でそれより低く、7割以下の出席者ではさらに低かった（図1）。「授業を受けることによって成長し、目標を達成し、成果を得ることができた」という充足感が、授業にもっとも積極的に参加したグループでもっとも高いわけではなく、ある程度積極的に参加したグループで高いという事実は何によるものであろうか。また、この「成果満足度」は、2年次履修者より3年次履修者の方が高かった。

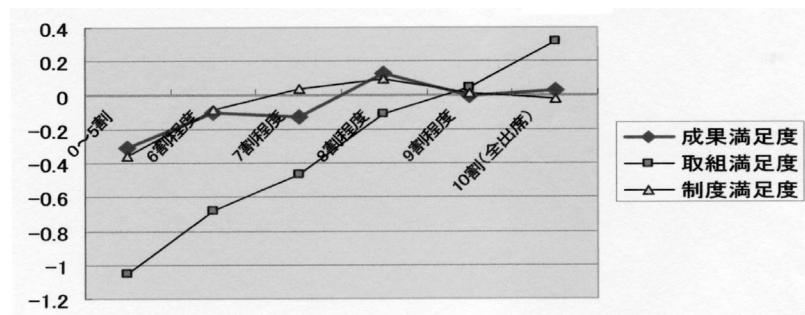


図1 出席状況別にみた、各満足度

授業評価における行動面と成果にかかわる主観的評価とが必ずしも一致していないことを指摘した。学生が授業に積極的に関わったにもかかわらず、その学生たちの知的関心・期待に授業がこたえられずに不満感ないしは疲弊をもたらしているのか。一方で、上でも指摘したように、無理せずそこそこ授業に参加している学生が、目標や興味・関心をもたずに安易に満足している可能性も考えられよう。そこで、授業への行動と主観的満足度との関連を、履修前の関心・意欲を加味してさらに分析する。もともとの関心・意欲の高低が、履修行動を経由して授業への主観的な評価にどのように結びついているかを確かめたい。

4. 分析方法と結果

まず、履修前の関心・意欲を変数化した。履修前の態度は、講義要項の該当欄をどの程度読んだかという質問への回答（よく読んだ／ざっと読んだ／あまり読まなかった／まったく読まなかった）と、履修中コースの選定にあたって重視した項目への回答を用いる²⁾。

本学部の「社会調査および実習」は20前後のコースが毎年設置され、学生はそこから希望コースを選ぶ。履修の前年度の1月に該当部分の講義要項が配布され、学生はそれを読んで複数の希望コースを順位をつけて届け出、その後、希望者が多かったコースでは抽選が行われてコースが決定

する方式をとっている³⁾。

履修前の学生のとりくみの姿勢は学生自身の回答によればきわめて良好で、講義要項は半数が「ざっと読ん」であり、3割が「よく読ん」でいる。講義要項を読んで希望コースを決めなければならないシステムであるゆえかもしれないが、一方で2割はこのシステムにもかかわらず、講義要項を読まずにコースを選んでいる。また、コース選択の際に、「講義要項の記載内容に興味を持てるかどうか」「コースの内容（方法論）が量的調査／質的調査／複合型であるかどうか」をそれぞれ5点尺度（「非常に重視した」「やや重視した」「どちらともいえない」「あまり重視しなかった」「まったく重視しなかった」）で回答している⁴⁾。上記の3項目を方向をそろえた上で主成分分析を行ない、1因子を抽出した（抽出された1因子は、3項目の分散の50.0%をカバーしている）。そして、上記因子変数の上位25%、中位、下位28%の3つに区分し、履修前の関心の「高」「中」「低」とした。

上記3グループに分けた上で、出席状況の3グループごとの「成果満足度」の平均値を示したのが図2である。図2から明らかなように、履修前の関心の「高」「中」「低」の順に「成果満足度」は高い。履修前の関心が「低」のグループでは、出席状況がいずれであっても「成果満足度」はマイナスを示している一方で、関心が「高」のグループでは出席状況にかかわらず「成果満足度」がプラスを示しており、履修前の関心が授業の成果に関する満足度を強く規定していることがわかる。

同時に、出席が中程度のグループでは、関心が中程度であった者の満足度が、関心が高かった者の満足度より若干高い。出席が中程度の者の満足度の高さが、関心も中程度であった者たちによるものであることがわかる。一方で、関心が高かったが出席が中程度と行動がともなわなかった学生は満足できていないことが示唆される。

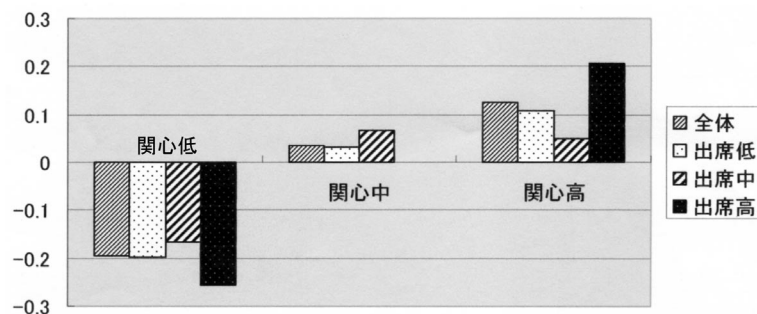


図2 関心ならびに出席状況別にみた、成果満足度

また、「成果満足度」がもっとも高いのが、関心が高く出席状況が良好なグループであることは首肯できるが、「成果満足度」がもっとも低いのが、関心が低く出席状況が良好なグループである点が注目される。関心が「中」程度という半数の学生の間でも、出席状況が良好なほど満足度が高まるわけではなく、「全出席」のグループの満足度が低くなっている。関心がもともと低い学生たちが、とりえず熱心に授業に出席してみたものの、成果を感じられないでいるのか、あるいは、関心が低いゆえに目的意識の低いままに出席だけはしていたというので成果は得られなかったのか。この点を解明するには、複数時点で観測する縦断的なデータが待たれる。

「授業時間外に必要とした時間」を用いて同様の分析を行なったところ（図3） ほぼ同様の結果がえられた。履修前からの関心が低いグループでは総じて「成果満足度」が低く、関心が高いグル

ープで高い。とくに、関心が高いグループに着目すると、授業時間以外で費やした時間が多いほど成果に関する満足度は高まっている。ここでは、もともとの関心が高い場合、積極的な授業への参加が成果満足度を高めている可能性が示唆される。また、「60分」ないし「90分」とかなり積極的に授業にとりくんだ学生においては、もともとの関心が「中」程度であっても、「高」かった者におとらぬ高い満足度を示している。授業へのとりくみが満足度につながっていることがここでは確かめられる。

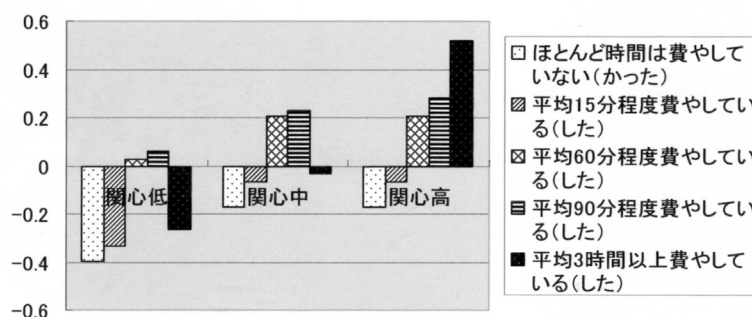


図3 関心ならびに授業時間外に必要なとした時間別にみた、成果満足度

一方で、ここにおいても、関心が「低」ないし「中」のなかで「平均3時間以上費やした」というもっとも積極的に授業に関与したグループにおいて、成果に関する満足度がマイナスになっている点が注目される。週に「3時間以上」も費やしていながら、もともとの目的意識が低いと、その努力が成果に関する満足度に結びついていないのである。

5. 考察

上記の結果は、まず第一に、履修前の学生の関心啓発の重要性を指示するものであるといえよう。出席状況より履修前の関心が成果に関する授業への評価を規定しているのであれば、社会調査実習を始める前の時点で、実習への関心ならびに学生の意欲を喚起することが、履修成果を高める上で重要となるからである。さらに、事前の関心が高ければ、積極的な授業参加が成果満足度を高めていることも確かめることができた。学生の授業への出席や関与を求めるより先に、授業開始前の関心喚起が必要であることが示された。

あわせて、前節の分析からは、授業への関心が低いながら、きわめてまじめに授業に出席し、かつ、きわめて熱心に授業に取り組んでいる一群の学生の存在が浮かび上がってきた。彼らにおいては、行動面での授業への関与が成果評価に結びついていない。この事実は、調査実習の面白さが伝わっていないという現実を示してもいる。すなわち、事前に関心を持っていないと、多大な時間を授業に投与したにもかかわらず、参加してよかったという実感を感じてもらえていないことになる。時間を投資したことから、むしろ授業への徒労感が誘発されているやもしれない。おそらく彼らは、どの授業に対しても熱心に取り組んでいることであろう。関心が低いないしは中程度で出席状況がきわめてよい学生は、全体の2割を占めている。彼らへの働きかけ、目的意識の喚起、関心の啓発を、とくに配慮して実践すべきではないだろうか⁵⁾。

なお、本論で「履修前の関心」として操作化した指標は、あくまで授業履修中に測定したもののゆ

え、ゆがみが生じている可能性は否定できない。学生の関心ならびに行動がどのように主観的な評価の形成にむすびついていくかをたどるには、追跡法によるデータを用いた分析を待たなければならない。

【謝辞】

本稿で用いるデータは、2008年度に社会学部自己点検評価委員会が実施した授業評価アンケートである。回答いただいた社会学部2～4年生（当時）に感謝します。

【注】

- 1) 回収データの基本属性ならびに単純集計は <http://www.soc.toyo.ac.jp/jikotenken/jugyohyoka/index.html> を参照にされたい。
- 2) 履修前の時点でのことをたずねているが、測定自体は1時点で行われた横断調査であり、また、履修し終わった単位取得者も回答には含まれているので、縦断的な測定がなされているわけではない点に注意が必要である。
- 3) ちなみに、アンケート回答者のなかで、コースが「希望通りだった」者は67%、「希望通りではなかった（抽選で割り当てられた）」のは29%、「もともと希望はなかった」者は4%であった。
- 4) これら2項目のほかに、「担当教員に好感をもてるかどうか」「友人が受講しているかどうか」「時間割の都合」についても同様にたずねている。しかしながら、この5項目の回答の方向をそろえた上で主成分分析を行なったところ、2つの成分が抽出された。1つは「担当教員に好感をもてるかどうか」「友人が受講しているかどうか」「時間割の都合」の負荷量が高く、いわば状況依存的な選択を意味しているものと解釈された。もう1つは「講義要項の記載内容に興味を持てるかどうか」「コースの内容（方法論）が量的調査／質的調査／複合型であるかどうか」の2項目の負荷量が高かった。この結果から、5項目のうちの2つを履修前の学生の態度をあわらすものとして本論で用いることにしたものである。
- 5) 事前の関心の程度と出席状況の程度とを合わせたタイプ別に、「社会調査および実習」授業に寄せられた改善意見も検討したが、そこでも出席状況よりむしろ事前の関心の程度によって意見がわかれる傾向を認めることができた。

【参考文献】

- 大屋幸恵、2008、「大学における調査教育の課題と意義」『社会と調査』創刊号、pp.43-49。
- 沖裕貴・林徳治、2000、「学生の受講意欲に寄与する因子について：1999年度後期、京都経済短期大学授業評価アンケートの分析」『日本教育情報学会第16回年会』pp.40-43。
- 田実潔・竹原卓真、2008、「学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究：授業評価アンケートの分析から」『北星論集』45号、pp.37-43。
- 田実潔・竹原卓真、2009、「学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究(II)：授業評価アンケートの分析から」『北星論集』46号、pp.65-72。
- 八木紀一郎、2004、「学生による授業評価データの分析と解釈」『京都大学高等教育研究』10号、pp.59-66。

【Abstract】

Course Evaluation by Students of Social Research Laboratory

Michiko NISHINO, Kenji SUGIYAMA

Hiroko UENO, Yuko SUDA

Shinji MIKAMI

In this paper, using course evaluation data by students, subjective evaluations to the course of social research laboratory of students are analyzed. The data was obtained through the 2008 course evaluation research of the faculty of sociology in Toyo University. The size of the data is 1,183 persons. The evaluations are analyzed from two points of view. One is the behavioral such as the percentage of attendance and the amount of time invested to attain the course. Another is the subjective. The latter is measured through factor analysis of 11 items, resulting in three factors: the result satisfaction, the commitment satisfaction, and the system satisfaction.

The result satisfaction covered most of the variances of the 11 items. Hence, analyzing the relationship between the result satisfaction and the percentage of attendances, students who attend the course more often are not fully satisfied. To explain this contradiction, one hypothesis is proposed. That is, when the interests were low before the beginning of the course, then the subjective assessments to the course after that would be low no matter of the commitments to the course.

As a result of the analysis, the hypothesis is verified. More than the percentage of attendance or the amount of invested time for the course, the degree of the preceding interests to the course is more effective to raise the degree of the result satisfaction. It is also found that a group of students who have little interests to the course but have high commitments are very lowly satisfied. Furthermore it is proved that if the precedent interests are high, then higher commitments improve the degree of the result satisfaction.

These results show the importance of enlightenment of interests to the course among students. According to the results, about 20% of the students have little or not so high interests to the course before but have high commitments. To encourage them to have a purpose and interests of the course is the very emergent subject to us.